

## *Genius English Readings Revised*

# この時代にふさわしい英語教科書

英学者  
斎藤兆史



### ◆最新の英語教育の動向

本論に入る前に、最新の英語教育の動向に触れておきたい。おそらくは多くの英語教育関係者が感じているとおり、昭和後期以来、英語教育界で猛威を振るっていたコミュニケーション中心主義が急速に勢いを失い、逆に文法や読解、さらには訳読の効用が見直されはじめている。英語教育研究の本場イギリスでも、イギリス応用言語学会の長たる Guy Cook が *Translation in Language Teaching* (Oxford University Press, 2010) という本を出し、コミュニケーション・アプローチを批判しつつ、語学学習における訳の効用を説いている。日本でも、つい先頃、東京大学の菅原克也教授が『英語と日本語のあいだ』（講談社、2011）を出版し、訳読擁護論を展開している。長らく「西洋ではとうの昔に廃れた Grammar-Translation Method を日本ではいまだに用いている」と言われてきたが、西洋の GTM と日本の訳読が別物であることも学問的に証明された（平賀優子『日本の英語教授法史——文法・訳読式教授法存続の意義』、東京大学大学院総合文化研究科博士論文、2007）。

とはいえ、私は日本の英語教育を昭和中期以前の姿に戻せというつもりは毛頭ない。すぐれた英語力を身につけた日本人は、地道に辞書を引きつつ、文法も読解も会話もバランスよく勉強してきたのであり、これからの時代は、伝統的な教授法と新しい教授法研究の成果を融合させ、クラスの特質に応じ（ここが大事）、さまざまな英文を速

読、精読、訳読など、いろいろな方法で読み、発音も聴き取りも会話もみなバランスよく教授するような授業運営が課題となる。

### ◆全体の印象

そういう意味で言えば、*Genius English Reading Revised* は、これからの時代にふさわしい優れた英語教科書だと言える。実際にはリーディングの授業において読解中心に用いられているのかもしれないが、読解ばかりでなく、音声面の学習もはじめ、多くの課業、発展学習を可能ならしめる仕立てになっている。以下、この教科書のなかで私がとくに評価に値すると思う項目について説明する。

### ◆高度で多彩な読み教材

まず教科書を開いた瞬間に感じることは、その密度の濃さである。内容の薄い会話文や写真やイラストだらけのコミュニケーション英語の教科書が増えたことを苦々しく思っていた英語教師の立場からすると、久々に頼もしいと思える骨太の教科書だ。内容も多彩で、随筆、説明文、自己紹介文、新聞記事、声明文（しかも、私の大好きなバートランド・ラッセルとアインシュタインが発表した、いわゆる「ラッセル=アインシュタイン宣言」なのだから、うれしくなってしまうではないか）、手紙文、さらに、敬遠される傾向にあるとはいえ、本来の読解教材にはなくてはならない文学作品の一節までしっかりと備えている。英文も、高校のレベルからすれば比較的高度であり、なか



なか読み応えがある。

#### ◆発音学習への配慮

これも教科書を開いた瞬間に気づいたことだが、英文中の重要単語が発音記号とともにページの下に記されている。この部分を活用すれば、優れた発音指導ができそうだ。近年、英語ざらいを作らないようにとの配慮からか、中等教育において発音記号の指導が忌避される傾向にあるが、発音記号などというものは音符と同じで、早いうちに読み方を教えてしまうにかぎる。大学の教壇に立っていて実感するのは、英語教育の現場でコミュニケーションだ、オーラルだと騒いでいるにもかかわらず、/l/と/r/、/s/と/ʃ/など、基本的な音の区別がつかない学生がむしろ増えていることである。そのような学生に聞いてみると、中高できちんとした発音指導や音読指導を受けていないという。発音・音読指導は、できるだけ早いうちから始めてほしいものだ。

#### ◆聴解学習への配慮

各課の教材を読み終わったあとには、それについての生徒の理解度を確認し、さらに発展的な学習をうながすため、Comprehension, Keys to Reading, Vocabulary という3項目にわたる問題が設定されている。そして、Comprehensionの最初には、読み教材に関する英語を聴いて答える聴解問題がかならず設けられている。設問自体は、正誤問題、穴埋め、選択問題など、さまざまな形式を採っているが、ある内容に関する英語を単に目で追わせるだけでなく、音声でも確認させるためのすばらしい工夫である。

#### ◆語彙・文法学習への配慮

また、読み教材が印刷されたページの傍注の部分では本文中の重要語句が説明されている。さらに、Keys to Readingの項目では、次項で述べる和訳に加え、文章構成、句読法、分詞構文をはじ

めとする文法規則が、Vocabularyの項目では、派生や造語の規則などが丁寧に解説されている。最近、多読を中心に据えた教授法のなかに語彙や文法の学習を軽視したものが見受けられるが、やはり学習のバランスを考えた場合、読解と語彙・文法の学習は組み合わせて行なったほうがいい。

#### ◆和訳の効果的な利用

そして、本稿の最初に述べたこととの関連において大いに評価したいのは、この教科書が和訳を決して軽視していないということである。先述のKeys to Readingの項には、かなり長い英文の全訳、部分訳が課業として設定されている。日本では、しばらくの間、「英語の授業なのだから日本語を使わないほうがいい」との素人考えが蔓延していたが、ある程度学習者言語を用いたほうが語学学習が効果的に行なわれることは、最初に紹介したCook (2010)でも論じられている。最初から最後まで訳だけの授業ではまずいが、日本の中等教育の英語の授業のなかには、かならず英文和訳や訳読の部分がなくてはいけない。

#### ◆伝統的教授法と最新の教授法理論の融合

この他、各課の最初に設定された設問を利用すれば英会話学習もできるであろうし、この教科書を素材として多くの発展学習が可能である。また、伝統的な教授法・学習法のみならず、最新の英語教育研究や応用言語学の研究成果を応用した課業もある（ただし、個人的には、「パラグラフ・リーディング」や「スキミング」などについて、高校生にさらに分かりやすい表現での説明が必要であると感じている）。とにかく、応用範囲の広い教科書であり、これが本来の英語教科書である。読解用の教科書としてのみ用いるのはあまりにもったいない。

(さいとう よしふみ・東京大学教授)